

極低出生体重児に対するNICU入院中の介入システムの確立と 地域保健所との連携

[分担研究：ハイリスク児の発達支援（早期介入）システムに関する研究]

分担研究者 前川喜平 1)

研究協力者 喜田善和 2)

共同研究者 郷古幸子 2) 小平令子 2) 栗橋裕子 2) 坂田美夏 2) 山口友美 2)

樋口久美子 2) 川島一枝 2) 山田豊美 2) 鈴木栄子 2) 寒竹正人 2)

要約:極低出生体重児に対するNICU入院中の介入の効果を紹介群と非紹介群で比較検討した。地域保健所との連携もはかった。入院中よりの早期介入は安全に施行でき、両親とくに父親の我が子に対する愛着度の向上がみられた。今後、引き続き月1回の親の会を行い（乳児期の介入）、修正1歳6カ月、2歳時、3歳時と経時的に発達評価を行っていく予定である。

見出し語：ハイリスク新生児、極低出生体重児、早期介入、発達支援、early intervention

研究目的：出生体重1500g未満の極低出生体重児の発達支援のため、NICU入院中よりの早期介入を行い、早期介入を行わなかった（非介入）群と比較検討し、早期介入の効果を評価する。

研究方法：当科に入院した極低出生体重児のうち重篤な後障害の危険の少ない児で、比較的呼吸状態の安定した生後2-4週に家族の承諾の得られた12家族を対象とし、封筒法により無作為に、これまで通りの介入内容の群（非早期介入群）6家族、早期介入群6家族の2群に分けて検討した。親子愛着度のアンケートは当科で独自に作成し、両親に対し入院時より隔週に退院まで行った。両親の心理不安を評価するために介入開始時期と退院時に両親にSTAI状態不安・特性不安検査を用いてアンケート調査を行った。保健所への入院時の連絡票も新規に作成し、入院早期より保健所への連絡を行った。

結果：1.患者背景

早期介入群は平均在胎27.9週、平均出生体重は1093g、非介入群は平均在胎30.3週、平均出生体重は1101gと若干早期介入群に在胎週数の短い傾向がみられた。

両親の年齢は早期介入群の父29.8歳、母28.2歳、非介入群の父30.0歳、母28.0歳とほぼ同年代であった。

2.親子愛着度アンケート

入院時と退院時を比較すると、両群ともに両親の愛着度点数の向上がみられていた。とくに早期介入群の父の点数の向上が著しかった。早期介入群において介入開始時に一過性に点数の低下する傾向がみられた。両群とも母親は特定の項目（児に申し訳ない、今後の発達が不安）が低かったが、父親にはそのような傾向はみられなかった。

3.STAI状態不安・特性不安検査

早期介入開始時点と退院時で状態不安の変

Early Intervention of the Very Lowbirth Infant in NICU and Collaboration with Regional Public Health Center

1)東京慈恵会医科大学小児科 Kihei Maekawa, Jikei University, Department of Pediatrics

2)松戸市立病院新生児科 Yoshikazu Kida, Sachiko Gouko, Reiko Kodaira, Yuko Kurihara, Mika Sakata,

Tomomi Taguchi, Kumiko Higuchi, Kazue Kawashima, Toyomi Yamada, Eiko Suzuki and Masato Kantake,

Matsudo Municipal Hospital, Department of Neonatal Medicine

化をみると、両群ともに退院時には両親の状態不安の改善がみられ、両群で心理不安状態に差はみられなかった。

4. 保健婦のNICU入院中の訪問指導

事前に各保健所に主旨の説明を行い、早期介入群6例の地域保健所に入院時連絡表(表4)を用いて、入院中よりの訪問指導依頼を行ったが、NICU入院中の保健婦の訪問指導は1例のみ(16.7%)であった。

5. NICU入院中の親の会の運営

発足当初より両親主導で病院内の会議室を用いて月1回の親の会を行った。親同士で都合の良い日に決めて行っているため、両親は毎回ほぼ全員出席した。とくに話し合いのテーマは決めずに行ったが、会話はいつもはずんでいた。児の月齢に差があったため、先輩が後輩に指導している場面がよくみられた。毎回新生児科医師、看護婦5-6名がボランティアで参加し、必要に応じ助言を行った。同席の児の兄姉のお守りも医師、看護婦で行った。

6. 早期介入の安全性

早期介入群は従来よりも面会時間を長くし、保育器収容児も両親によるおむつ交換、抱っこ、授乳など児に対する接触を増やしたが、それによる事故や感染症の増加は認めなかった。

考案：今回の検討で、入院中の早期介入により母親よりも父親の愛着度が向上したことは、病棟内で、母親と同様に父親の早期タッチングを行ったことの効果と思われる。また親の会を設定して月1度の話し合いに父親が率先して参加した意義も大きいと思われた。早期介入により両親の不安を増すこともな

いこともわかった。入院中よりの早期介入の安全性も確認できた。今回、NICU入院中の保健婦訪問指導が充分に行われなかったことは、当科の依頼の直後に母子保険法の改正が行われ、保健所組織の再編があった影響とも考えられる。今後は定期的な地域保健婦との連絡会の設置等、よりいっそう連携を密にしていきたい。

今後も親の会を引き続き月1回、月齢に応じた遊びを中心に行い(乳児期の介入)、修正1歳6カ月、2歳時、3歳時に発達評価の比較検討を行っていく予定である。

文献：

- 水口公信ら、日本版 STAI 状態・特性不安検査 使用手引 1991、三京房 京都
- 竹内徹他訳、クラウド、ケネル 親と子のきずな 1985、医学書院 東京



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:極低出生体重児に対する NICU 入院中の介入の効果を介入群と非介入群で比較検討した。地域保健所との連携もはかった。入院中よりの早期介入は安全に施行でき、両親とくに父親の我が子に対する愛着度の向上がみられた。今後、引き続き月 1 回の親の会を行い(乳児期の介入)、修正 1 歳 6 カ月、2 歳時、3 歳時と経時的に発達評価を行っていく予定である。